

国際連語論学会 5 月例会

日時：2017 年 5 月 20 日（土）13：30～15：30（予定）

場所：大東文化会館 K-401（東武東上線東武練馬駅より徒歩 4 分）

研究発表（1）：小路口ゆみ「中日両言語の視点の違いについて」

研究発表（2）：蔡娟「《朱子語類》における「V+将+C」方向式」

※研究発表（1）

ヒト：小路口ゆみ（大東文化大学博士後期課程 3 年）

テーマ：“把”構文における動詞について

要旨：王力（1985：130）¹は、処置義の“把”構文に用いられる動詞は必ず及物動詞でなければならないが、処置義以外の“把”構文に用いられる動詞は不及物動詞を用いてもいいと言っている。同じ動詞が全ての種類の“把”構文に使えるわけではない。例えば、動詞“想”は“把”構文のなかで次のように用いられている。

(1) 祥子的心一动，忽然的他会思想了，好象迷了路的人忽然找到一个熟识的标记，把一切都极快的想了起来。(2)

(2) 把虎妞的话从头至尾想了一遍，他觉得象掉在个陷阱里，手脚而且全被夹子夹住，决没法儿跑。(9)

(3) 把这个想开了，连个苍蝇还会在粪坑上取乐呢，何况这么大的一个活人。(21)

例（1）は「N₁ + “把” + N₂ + V + 趨向補語」の構造の“把”構文であり、例（2）は「N₁ + “把” + N₂ + V + 数量形式」の構造の“把”構文であり、例（3）は「N₁ + “把” + N₂ + V + 結果補語」の構造の“把”構文である。しかしながら、動詞“想”は「N₁ + “把” + N₂ + V + “在・到・给・成” + N₃」の“把”構文に用いることができない。要するに、“把”構文に用いられる動詞は文構造によって違ってくる。それぞれの文構造に用いられる動詞はどの特徴を持っているかについて、本発表では、分析・考察する。

※研究発表（2）

ヒト：蔡娟（大東文化大学非常勤講師）

テーマ：《朱子語類》における「V+将+C」方向式

要旨：南宋の理学家語録である《朱子語類》には、方向補語構造に述語動詞 V と方向補語 C の間に、文法標識“将”が挿入されている「V+将+C」方向式が見られ、意味上、“将”が挿入されていない「V+C」方向式とほとんど変わらない。例えば、

(1a) 此却是真个事急了，不觉说将出来。《朱子语类・卷三十六》

（说将出来：言ってしまった）

(1b) 圣贤说出来底言语，自有语脉。《朱子语类・卷十一》

（说出来底言语：語ったことば）

(2a) 若论看文字，则逐句看将去。《朱子语类・卷十二》

（看将去：読んでいく）

¹王力（1985：130）は、以下のように述べている。“普通处置式的叙述词必须是及物动词，活用时可不及物动词。”

(2b) 且要虚心逐一说看去。《朱子语类・卷十一》

(看去：読んでいく)

「V+将+C」方向式の“将”の文法化について、すでに多くの論考が発表されているが、“将”の文法機能について、研究者たちの間で未だに意見が統一されていない。本発表では、《朱子語類》に見られる「V+将+C」方向式を取り上げ、具体的な用例をあげながら、“将”の文法機能上の性質に再検討を加える。また、構文と意味の両面から、“将”が挿入されている「V+将+C」方向式と“将”が挿入されていない「V+C」方向式とを比較し、両構造の相違点をまとめる。